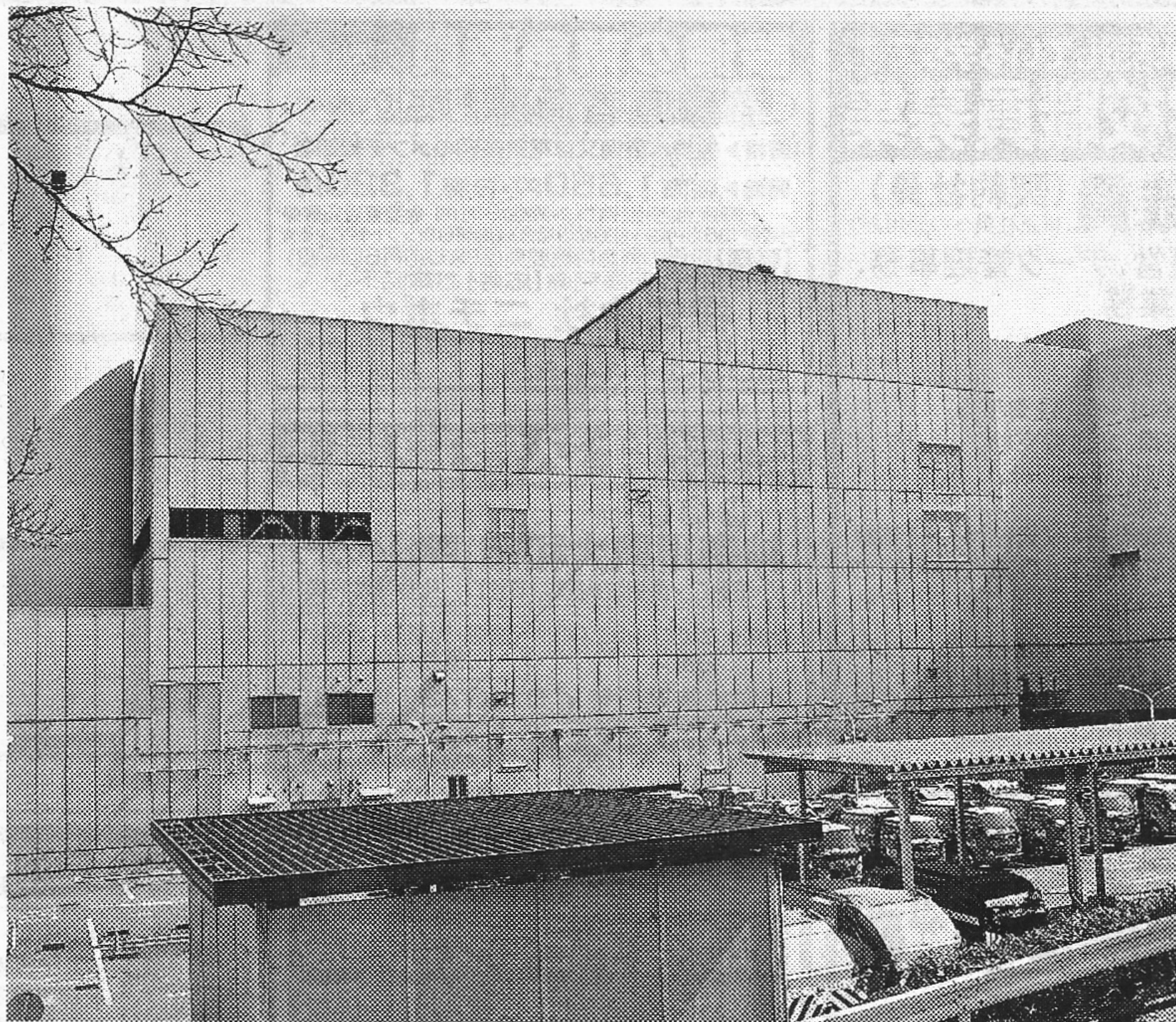


# 町田市、生ごみ燃料化へ

## 新施設で処理、メタンガスに

町田市は、都内の区市町村の清掃事業として初めて、収集した生ごみのバイオガス燃料化に乗り出す。省エネなどが狙いで、老朽化した焼却施設を更新するのを機にバイオガス化施設を併設し、2020年度までに稼働させる計画だ。市は採算面などメリットを強調するが、燃料化後に残る廃棄物の処理方法を巡り、疑問の声も上がっている。



現在の焼却施設。この付近にバイオガス化施設を建設する予定だ＝町田市下小山田町

## 市民からは「残渣の肥料化探れ」の声

ごみは  
どこへ



広瀬立成さん

バイオガス燃料化施設は同市下小山田町の現在の焼却施設の敷地内に35億円ほどで建設予定。一日に50トンの生ごみ処理が可能で、生ごみを発酵させて、燃料になるメタンガスを発生させる。市のごみ収集車10台を一日中走らせても余るほどの燃料が一日に得られる。残りはガスエンジンなどによる発電に回すという。

ス化施設は一般的に運用コストが高く、その多くを発酵処理に必要な水や電気の使用料が占めるが、市の計画では水は地下水を使い、電気は発電した分でまかなう予定だ。残った電気を売ることできるという。

売電収入を差し引くと費用がどのくらいかかるか、市はまだ詳細な見込みを示していないが、市の担当者は「政府の固定価格買い取り制度で売電の利益も大きいため、コストはかなり少なく済むだろう。最高効率で動かせるよう調査や実験を重ねる」と話す。

ただ、近くの住民からは、「本当にベストの処理方法なのか」と心配する声も上がる。

生ごみの肥料化に取り組んできたNPO法人「町田発・ゼロ・ウェイストの会」理事長で物理学者の広瀬立成さん(74)は「発酵した後の残渣をどうするか、議論と研究が尽くされていない」と指摘する。

生ごみはガス化しても、水分を含め6〜7割の廃棄物が残る。計画では、水分は下水処理し、残りの搾りカスは焼却する予定。どちらにも肥料にはせず、捨てることになる。市は「異物が含まれている可能性があるため」とするが、広瀬さんは「残渣や水分には豊富な栄養が含まれる。市民と一緒にって肥料化する道を探るべきだ」と話す。

広瀬さんは2011年まで、ごみ資源化を目指す市の審議会に識者として参加し、「ごみを作らない、燃やさない、埋め立てない」とする現行の基本計画策定にかかわった。その後も市に残渣の肥料化を再三要望してきたが、満足のいく回答はなかったという。

町田市と運用コストの点で違いはあるが、神奈川県横須賀市が実証実験後、採算面から導入を取りやめた例もある。広瀬さんは「税金の無駄遣いにしないためにも、建設する前に処理方法や経済的メリットを実証実験して分析するべきだ」と訴えている。

(高浜行人)